

「指導と評価の一体化」のための取組
～ I C T の活用を通して～

鹿屋市立串良中学校 教諭 枝迫 香菜

目 次

1 研究主題	1
2 主題設定の理由	1
3 研究の内容	1
(1) 評価規準の作成	
(2) 「知識・技能」「思考・判断・表現」に関する評価の概要	
(3) 「知識・技能」「思考・判断・表現」に関する評価の実際	
ア 「思考・判断・表現」を評価するペーパーテスト問題	
イ 「知識・技能」と「思考・判断・表現」を評価するパフォーマンステスト	
(4) 「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価の概要	
(5) 「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価の実際	
(6) I C T を用いた評価の総括	
4 研究のまとめ	8
(1) 研究の成果と課題	
(2) おわりに	

〔引用・参考文献〕

・ 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』	国立教育政策研究所	令和 2 年
・ 『中学校学習指導要領解説 外国語編』	文部科学省	平成 29 年
・ 『Teaching English Now Vol.47』	三省堂	令和 3 年
・ 『中学校学習指導要領解説 学習評価Q&A 外国語科』	鹿児島県総合教育センター	令和 2 年
・ 『こうすればできる！中学校外国語科の学習評価』	鹿児島県教育委員会	令和 2 年

1 研究主題

「指導と評価の一体化」のための取組 ～ICTの活用を通して～

2 主題設定の理由

平成29年3月に告示された中学校学習指導要領（以下「新学習指導要領」）が、令和3年度から全面実施された。私自身は、育児休業から復帰したタイミングであり、十分な準備ができない中、見切り発車となってしまった面がある。そこで、新しい教科書の教材研究や研修会等への参加を通して、新学習指導要領が目指しているものを少しずつでも理解できるよう努めた。その中で感じたことは、新学習指導要領が目指しているものの根幹は、これまでのものと大きく変わらないこと、新しい枠組みの中でこれまでの取組を整理し改善していくことで、授業に関しては十分に対応が可能であるということだった。

しかしながら、1学期が中盤に差し掛かったときに、「評価」という大きな課題があることに気付いた。まずは、観点別学習状況の評価が4観点から3観点到に整理されたことにより、ペーパーテストの作問をそれに合わせて変えていく必要がある。同じく、パフォーマンステストにおいても、3つの観点による評価を意識し、設定していかなければならない。何より、3つの観点をどのように理解し、評価していかなければならないかを十分に把握できていなかった。様々な研修会等に参加することを通して、このような悩みは他の英語科教員にとっても共通のものであること、理論を理解したところで、どのように実践へと落とし込んでいくのかが分からず困っている仲間が多いことが分かった。

そこで、これからの評価について考える基礎的な資料である『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（以下「国研資料」）を参考にしながら、評価に向けた具体的な取組について令和3年度から令和4年度にかけて研究することにした。

また、学校における働き方改革が進められる中においては、いかに「効果的」な学習評価をするかという視点とともに、いかに「効率的」な学習評価を行うかという視点も大切である。私が勤務する鹿屋市においては、校務支援システムである「スズキ校務」や一人一台のタブレット端末が整備されるなど、ICT環境が整っている。そこで、「指導と評価の一体化」のための取組を行う中で、これらを効果的に活用し、よりよい学習評価を行えるようにしたいと考えた。

これらのことから、研究主題を『指導と評価の一体化』のための取組～ICTの活用を通して～と設定した。

3 研究の内容

(1) 評価規準の作成

本校は、2人の教員が英語科を担当している。そこで、令和3年度1学期に教科部会を開き、これからの評価について共通理解を図った。教科部会においては、「①通知表における観点別学習状況の評価に関する記載内容について」「②具体的な評価規準や評価の場面について」「③評価・評定について」「④生徒・保護者へのフィードバックについて」の4点について確認した。以下はその際の資料である。

1 通知表における記載の方法

外国語	知識・技能	英語の特徴やきまりを理解し、これらの知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けている。
	思考・判断・表現	コミュニケーションの目的や場面等に応じて、外国語で簡単な情報や考えを理解したり、これらを活用して表現したりすることができる。
	主体的に学習に取り組む態度	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら主体的にコミュニケーションを図ることができる。

- 「指導と評価の一体化」のために、外国語の目標も「知識・技能」「思考・判断・表現」、「主体的に取り組む態度」に整理されたため、学習指導要領の目標を参考にして設定しました。(目標＝評価すべきこと)

♥ = 観察

★ = パフォーマンス

2 具体的な評価規準や評価の場面について

- 『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料「P33「内容のまとめりごとの評価規準(例)」を参考に、評価の場面を設定しました。(右は2年生の例です)
- 期末テストの問題は、この評価規準に沿って作ります。
- 2年生のパフォーマンステストは、「Come to my hometown」と「Q and A TEST」をALT 来校時に行います。私たちの他に、ALT にも評価をお願いします。
- 自分の担当学年について、同様の評価規準を作って評価してください。(本来は学期の始めにすべきことですが、今回は難しかったので今からできることとテストを中心にしましょう。)

3 評価・評定について

- 右の表にあるように、各項目を評価し、3観点のABCを付けます。
- ABCの評価を基に、評定を5段階で付けます。
Aを5点、Bを3点、Cを1点として、
15点・・・5 11点以上・・・4
7点以上・・・3 6点以下・・・2か1

4 生徒、保護者へのフィードバックについて

- 通知表の記載だけでは、どのように評価したのか、何ができていて、何ができていないのかが不明確です。そこで、裏面にあるような個票を返し、生徒、保護者へのフィードバックを行います。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
聞(聴)	[知識] 英語の特徴やきまりに関する事項を理解している。 [技能] 実際のコミュニケーションにおいて、日常的な話題や社会的な話題について、はっきりと話された文章を聞いて、必要な情報や概要、要点を捉えている。 ★ ALTによる自己紹介等	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、はっきりと話される文章を聞いて、必要な情報や概要、要点を捉えている。 ★ ALTによる「Come to my hometown」 ★ 期テスト 国(リスニング)	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、話し手に配慮しながら、主体的に英語で話されることを聞くとしている。 ♥ ALTによる自己紹介等の様子
読(読)	[知識] 英語の特徴やきまりに関する事項を理解している。 [技能] 実際のコミュニケーションにおいて、日常的な話題や社会的な話題について書かれた短い文章等を読んで、その内容を捉える技能を身に付けている。 ★ 期テスト 国(読解問題)	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて伝え合う技能を身に付けている。 ★ 期テスト 国(読解問題)	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、書き手に配慮しながら、主体的に英語で書かれたことを読もうとしている。 ♥ ALTのQ and A時のサインシート
話(話し言葉)	[知識] 英語の特徴やきまりに関する事項を理解している。 [技能] 実際のコミュニケーションにおいて、日常的な話題や社会的な話題などについて、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて話し合う技能を身に付けている。 ★ ALTのQ and A時	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題などについて、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて話し合う技能を身に付けている。 ★ 'Come to my hometown'の発音の様子	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手に配慮しながら、主体的に英語を用いて話そうとしている。 ♥ ALTのQ and A時のサインシート あいつ、聞き取りの様子を観察
話(書き言葉)	[知識] 英語の特徴やきまりに関する事項を理解している。 [技能] 実際のコミュニケーションにおいて、日常的な話題や社会的な話題などについて、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて、またはそれらを正確に用いて書く技能を身に付けている。 ★ 期テスト 国(読解問題) 作文問題	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題などについて、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて、またはそれらを正確に用いて書く技能を身に付けている。 ★ 'Come to my hometown'の原稿	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手に配慮しながら、主体的に英語を用いて話そうとしている。 ♥ ALTのQ and A時のサインシート



【資料1 令和3年度1学期の教科部会で使用した評価に関する資料】

この教科部会の設定は、本研究の最初の取組として非常に重要であった。今、見返してみるとまだ不十分な点も多いが、何より、国研資料にある「内容のまとめりごとの評価規準(例)」を活用することで、評価の全体像をつかむことができた。これまでの評価と大きく異なる「3観点」と「5領域」をどのように統括するかが一目で分かるため、この資料はその後も、本校英語科の評価における核となっている。試行錯誤はあったものの、現在はこの表に各学年、各学期の学習内容を当てはめながら本校の評価規準を作成している。実際に作成した評価規準の例(令和4年度1年生2学期分)は次のとおりである。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
聞くこと	【中間テスト・期末テスト】 <input type="checkbox"/> 短い英文を聞いて、状況に合う絵を選ぶことができる。 <input type="checkbox"/> 短い英文を聞いて、大切なことをメモすることができる。	【中間テスト・期末テスト】 <input type="checkbox"/> まとまりのある英文を聞いて、概要や要点を捉えることができる。	【自宅学習の記録】 <input type="checkbox"/> 教科書のQRコードを活用し、英語の音声の特徴を捉えながら英語を聞き取るための学習に取り組んでいる。
読むこと	【中間テスト・期末テスト】 <input type="checkbox"/> 教科書本文と関連する文章を読み、その内容を捉えることができる。	【期末テスト】 <input type="checkbox"/> ALTが書いたスピーチ原稿を読み、概要や要点を捉えることができる。	【音読チャレンジ9～11月】 <input type="checkbox"/> 音読チャレンジへ積極形に取り組んでいる。 【音読練習の記録】 <input type="checkbox"/> 自宅学習において、音読練習に粘り強く取り組んでいる。
話すこと〔やり取り〕	【パフォーマンステスト：ALT】 <input type="checkbox"/> Which month do you like? Why?の質問に、答えることができる。(PROGRAM6) <input type="checkbox"/> 買い物メモに従って、ハンバーガーショップで買い物をすることができる。(PROGRAM3)	【パフォーマンステスト：ALT】 <input type="checkbox"/> 好きな月に関する追加の質問に即興で答えることができる。(PROGRAM6) <input type="checkbox"/> 自分が行きたい国についての発表の後、1つの質問に即興的に答えることができる。(PROGRAM7)	【パフォーマンステスト：ALT】 <input type="checkbox"/> パフォーマンステストにおいて、アイコンタクト、相槌、エコイングなどを意識し、積極的に対話しようとしている。(提出されたビデオによる評価)
話すこと〔発表〕	【パフォーマンステスト：ALT】 <input type="checkbox"/> 原稿をもとに、ALTに自分の友人や家族を紹介することができる。(PROGRAM5)	【パフォーマンステスト：ALT】 <input type="checkbox"/> 自分が行きたい国について、2つの理由とともに発表することができる。(PROGRAM7)	【パフォーマンステスト：ALT】 <input type="checkbox"/> パフォーマンステストにおいて、自分の伝えたいことをよりよく伝えられるよう、工夫しながら話そうとしている。(提出されたビデオによる評価)
書くこと	【夏休み明け・中間・期末テスト】 <input type="checkbox"/> 基本的な語句や英文を書くことができる。 【中間テスト・期末テスト】 <input type="checkbox"/> 与えられた語句を並べ替えて英文を完成させることができる。	【中間テスト・期末テスト】 <input type="checkbox"/> ALTに自分の友人や家族を紹介するための英文を4文程度書くことができる。(PROGRAM5) <input type="checkbox"/> ALTの書いた英文の内容に関する質問を1文以上書くことができる。(PROGRAM7)	【夏休み課題・自宅学習・ワーク】 <input type="checkbox"/> 基本的な語句や文を書けるようになるまで、粘り強く課題に取り組んでいる。

【資料2 本校における評価規準の例（令和4年度1年生2学期分）】

(2) 「知識・技能」「思考・判断・表現」に関する評価の概要

今回の改訂により、これまでの評価の観点である「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」「言語や文化についての知識・理解」は、「知識・技能」と「思考・判断・表現」に整理された。この2つの観点について、参考文献や研修会を通して学んだことを、自分なりに次のようにまとめた。

観点	何を評価するか	
知識・技能	言語使用の正確さ	<ul style="list-style-type: none"> 英語の特徴や決まりに関する事項（「音声や符号」「語、連語及び慣用表現」「文、文構造及び文法事項」）を理解しているか。（知識） 外国語の知識を活用し、実際のコミュニケーションにおいて運用することができるか。（技能）
思考・判断・表現	言語使用の適切さ	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じて、適切な表現内容や形式を選択するなどしながらコミュニケーションを図ることができるか。

また、それぞれの評価を行う際の留意点を、以下にまとめる。

- ① 「知識・技能」の評価については、単に文法事項などの知識を理解しているかだけでなく、それらを運用する力（技能）が身に付いているかを評価する必要がある。そのため、ペーパーテストの出題方法や、「知識・技能」を評価するためのパフォーマンステストを工夫する必要がある。
- ② 「思考・判断・表現」の評価については、コミュニケーションを行う目的や場面、状況を設定することが大切である。また、使用する表現内容や形式を生徒自身に選択させるような評価場面を設定する必要がある。
- ③ 「知識・技能」では言語使用の正確さ、「思考・判断・表現」では言語使用の適切さを評価する。例えば“He like tennis.”のような英文の誤りがある場合、「知識・技能」の評価であれば不正解となるが、「思考・判断・表現」の評価の場合、コミュニケーションの目的（例えば、友人をALTに紹介するなど）を十分達成できる場合、大きな減点は必要ない。そのため、「知識・技能」がBの生徒であっても、「思考・判断・表現」はAの評価になることは十分にあり得る。

これらのまとめを基に、「知識・技能」「思考・判断・表現」に関する評価の視点を明確にし、実際に行った評価を(3)に示す。

(3) 「知識・技能」「思考・判断・表現」に関する評価の実際

ア 「思考・判断・表現」を評価するペーパーテスト問題

令和4年度2年生1学期末テストにおける「思考・判断・表現」を評価する問題は、次のことを考慮して作成した。

- ① コミュニケーションの目的や場面設定の明確化
 - ・ALTからメールが届いたという場面設定
 - ・自分の夏休みの計画について、ALTに返信するという目的の設定
- ② 活用できる表現内容や形式の例
 - ・自分の夏休みの計画を伝えるための **want to**, **be going to**, **will** などが選択可能
 - ・メールの書き方や相手の発言に対する **echo** の学習を活用可能

実際に作成した問題とその採点基準は次のとおりである。

9 ALTのIzumi先生から、次のようなメッセージが届きました。このメッセージに対するあなた自身の返事を英語で書きなさい。 【思考・判断・表現】

Hi students,

How are you?

Summer vacation is coming soon! This summer, I want to go to Hokkaido to eat *kaisen-don*. I also want to see beautiful flowers in Biei. I heard that we can see lavenders in July.

If I can't go there because of COVID-19, I want to enjoy talking with my friends online. They live in the Philippines.

What do you want to do during summer vacation?
Please tell me about your plan.

Best wishes,
Izumi

【採点基準】 次の観点から最大10点まで加算方式で採点する。

- ・メールの返信として適切な形式となっているか。・・・2点
- ・相手のプランに対する感想などの応答があるか。・・・2点
- ・相手の質問を理解し、夏休みにしたいことを書いてあるか。
正しく書けている1文につき・・・・・・3点
軽微なミスがあるが、意味が十分に伝わる1文につき・・・・・・2点
文の形が整わないが、伝えたいことが理解できる1文につき・・・・1点

本学年の生徒は、1年次からこのような問題に繰り返し挑戦しており、採点基準についてもその都度、説明してきた。そのため、生徒は間違いを恐れず、できるだけたくさんの英文を書こうと試み、これまでに学んだ様々な表現や形式から適切なものを選ぼうとする姿が見られるようになったと感じる。また、このような評価場面を学期当初に設定しておくことで、「このような問題を解ける生徒にしよう。」という意識が教師側にも芽生え、授業改善につながっていると感じた。

イ 「知識・技能」と「思考・判断・表現」を評価するパフォーマンステスト

令和4年度3年生2学期の「知識・技能」と「思考・判断・表現」を評価するパフォーマンステスト（1回目）は次のように行った。

- ・夏休み後最初のALT来校日に実施する。
- ・ALTと生徒による1対1のインタビューテスト形式で行う。
- ・What did you do during summer vacation?に正しく答えられるかを評価する。【知識・技能】
- ・追加の質問に即興的に答えることができるかを評価する。【思考・判断・表現】
- ・対話をタブレットで撮影し、回収した動画を見ながらALTとともに評価する。

次は実際の評価の様子である。



【写真1 ALTとのインタビューテストの様子】



【写真2 ロイロノートに提出された動画】

	What did you do during summer vacation? A~C	The more question A~C	Attitude A~C
	A	A	A
	A	A	A
	A	B	A
	A	A	B
	A	A	B
	A	B	A
	A	B	A
	A	A	A
	A	B	B
	A	B	A
	A	A	A
	A	A	B
	A	A	B
	A	A	A
	A	A	A
	A	A	A
	A	B	A

「知識・技能」をA~Cで評価。言語使用の正確さを評価するため、「過去形」を正しく用いていなければAにはならない。

「思考・判断・表現」をA~Cで評価。言語使用の適切さを評価するため、ALTの質問を理解し、適切に応じられていれば、多少の文法的誤りがあってもAになり得る。

【資料3 ALTと記入した評価簿】

この評価方法は、令和3年度から試行錯誤しながら継続的に行ってきた。その中で、いくつかの気づきがあったので以下にまとめる。

- ① 1回のパフォーマンステストであっても、「知識・技能」と「思考・判断・表現」の両方の視点から評価することが可能である。
- ② パフォーマンスの様子を動画撮影することで、じっくりと評価をすることができ、また生徒の変容を見取る際にも活用できる。
- ③ 動画を基にALTとともに評価を行う際は、A～Cの評価規準をALTに明確に伝える必要がある。また、途中で迷う場合は互いに協議し、B+、A-などの評価も可とするとスムーズである。
- ④ 特に「思考・判断・表現」の評価については、その表現で正しく伝わるのかが教師だけで判断できない場合、ALTの意見が非常に有益である。
- ⑤ 1時間で40人を評価する場合は、「一人40秒」など時間を決め、タイマーを使うとよい。生徒には、待っている間に動画撮影の事前準備をさせておくとよい。

このような評価場面を設けることにより、実際のコミュニケーション場面において、「知識・技能」や「思考・判断・表現」を評価することができる。また、これを繰り返すことによって、生徒はALTと1対1で話す環境に慣れ、積極性が増していくと感じている。特に、分からないことがあったときに聞き返したり、自分の言いたいことを何とか伝えようと工夫したりする力は、このような場面を通して育まれると実感した。

(4) 「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価の概要

国研資料によると、中学校外国語科における「主体的に学習に取り組む態度」については、次のように記述されている。

- 「主体的に学習に取り組む態度」は、外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語でコミュニケーションを図ろうとしている状況进行评估する。
- 上記の側面と合わせて、言語活動への取組に関して見通しを立てたり振り返ったりして自らの学習を自覚的に捉えている状況についても、特定の領域・単元だけでなく、年間を通じて評価する。

ここに示されているとおり、外国語科における「主体的に学習に取り組む態度」は、聞き手、読み手、話し手、書き手のいる具体的なコミュニケーション場面で評価されるものである。そのため、「主体的に学習に取り組む態度」は、言語活動やパフォーマンステスト等の場面で、「思考・判断・表現」と基本的には一体的に評価するものとされている。

また、コミュニケーション場面での状況だけではなく、その前後の見通しや振り返りについても、継続的に評価していく必要がある。

(5) 「主体的に学習に取り組む態度」に関する評価の実際

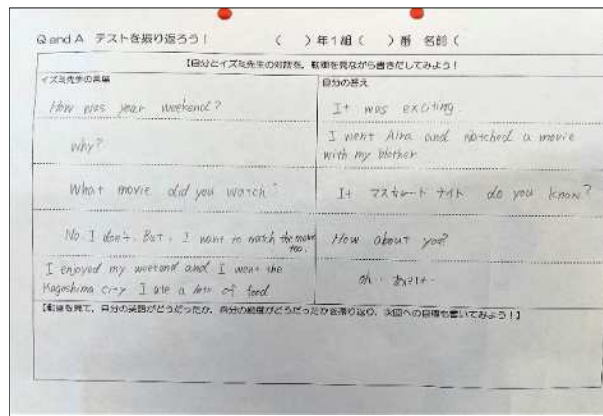
5ページの資料3には、「知識・技能」と「思考・判断・表現」の評価の他に、“Attitude”と書かれた欄があるが、これは「主体的に学習に取り組む態度」の評価である。本校では、パフォー

マンステストを行う際には、毎回この“Attitude”の評価を行っている。評価を行う際には、「アイコンタクト」「相手の発言に対する反応」「聞き返し」「相手の発言を促す表現の有無」など、活動の内容に応じて重点を決め、ALTとビデオを見て確認しながら評価する。できるだけ多くの場面において評価することで、生徒の変容などを客観的に捉えることができると感じている。

次に、言語活動への取組に関する振り返りについては、パフォーマンステストの際に撮影した動画を見直し、自己評価する場面を設定している。次は自己評価の例である。



【写真3 動画を見直し自己評価している様子】



【写真4 生徒が記入中のワークシート】

このワークシートでは、まず、自分のパフォーマンステストの動画をヘッドフォンをして見直ししながら、ALTの発言と自身の発言をそのまま書き出す部分がある。このことにより、相手の発言をその場では理解できず、適切に答えられなかったことに気付く生徒や、三単現のsなど、細かな文法事項に気付く生徒もいる。一方で、何度聞いてもALTの発言が理解できず発言を書き出せない生徒もいるため、その際には、教師も一緒に録画を確認し、ALTの発言について説明した上で、再度聞かせるなどの補充学習も行った。

次に、動画を見ながら、自分のコミュニケーションの態度（積極性や相手への配慮）が適切であったかを振り返る部分がある。ここには、「相手の目を見ることができていなかったので、次はアイコンタクトをがんばりたい。」といった次の活動への見通しを書く生徒も多くいる。また、パフォーマンステストのたびに、このような自己評価を書かせることで、実際に次の学習に生かそうとしているかといった視点での評価が可能となった。

このように、タブレット端末などのICT機器は、生徒の英語学習に対する粘り強さや自らの学習を調整しようとする態度を育む上で、非常に有益であると感じた。

(6) ICTを用いた評価の総括

学期を通して蓄積してきた評価については、校務支援システムである「スズキ校務」を用いて総括することにした。具体的には、各評価場面での結果をスズキ校務の「補助簿」に記録し、それを基に評価評定を作成する。このシステムを活用することには、次のような利点があった。

- 英語科の2人がいつでも補助簿を確認できるため、評価の視点を共有しやすい。
- それぞれの教師が評価した内容を一つのデータに簡単にまとめることができる。
- 「補助簿」に蓄積した評価とペーパーテストの観点別素点を組み合わせ、観点別学習状況の評価や評定の案を簡単に作成することができる。
- 集約したデータを基に、評価について生徒や保護者に説明することができる。

実際に令和4年度3年生2学期の評価を行う際には、資料4にあるように多くの評価対象から学期末評価を効率的に行うことができた。

ただし、ここで作成されるのは、観点別学習状況の評価や評定の「案」に過ぎない。

実際には、評価対象となっている個別の評価の妥当性を検討したり、一人一人の学習状況を見直したりしながら、適切な評価となるよう調整を行う必要がある。

また、このような調整を行うことにより、次の評価について考えたり、授業改善の視点を得たりすることができると感じた。

選択	観点	評価対象	参照先
<input checked="" type="checkbox"/>	知識・技能	2学期中間テスト	試験入力
<input checked="" type="checkbox"/>	知識・技能	【ALT】夏休み What did yo	補助簿
<input checked="" type="checkbox"/>	知識・技能	2学期末テスト NEW	試験入力
<input checked="" type="checkbox"/>	思考・判断・表現	2学期中間テスト	試験入力
<input checked="" type="checkbox"/>	思考・判断・表現	【ALT】夏休み one more Q	補助簿
<input checked="" type="checkbox"/>	思考・判断・表現	【ALT】即興英会話 (Yes/No)	補助簿
<input checked="" type="checkbox"/>	思考・判断・表現	【ALT】即興英会話 additional	補助簿
<input checked="" type="checkbox"/>	思考・判断・表現	2学期末テスト NEW	試験入力
<input checked="" type="checkbox"/>	態度	夏課題提出	補助簿
<input checked="" type="checkbox"/>	態度	夏課題内容	補助簿
<input checked="" type="checkbox"/>	態度	ALTの夏休み(発表)	補助簿
<input checked="" type="checkbox"/>	態度	【ALT】夏休み attitude	補助簿
<input checked="" type="checkbox"/>	態度	【ALT】即興英会話	補助簿

【資料4 スズキ校務に蓄積された評価対象】

4 研究のまとめ

(1) 研究の成果と課題

本研究の成果としては、次の点が挙げられる。

- 国研資料にある「内容のまとまりごとの評価規準（例）」を活用し、本校における「3観点」と「5領域」を統括した評価規準を作成することで、どのような場面で何を評価すればよいかを英語科内で共有できるようになった。
- 「知識・技能」と「思考・判断・表現」の評価についてまとめたことで、それぞれを効果的に評価するためのペーパーテスト作成やパフォーマンステスト設定の視点を獲得することができた。
- 「主体的に取り組む態度」をパフォーマンステストの中で評価し、その結果を蓄積することで、より具体的に態度の評価を行えるようになった。
- タブレットを利用することで、パフォーマンステストを録画できるようになり、教師の評価や生徒の振り返りに役立てることができた。
- 校務支援システムを活用することで、評価の結果を教科内で共有したり、効率的に評価を行ったりすることができた。

一方、今後の課題としては、次の点が挙げられる。

- △ パフォーマンステストが「話すこと」「書くこと」に偏りがちであるため、「読むこと」「聞くこと」のパフォーマンステストの在り方についても研究を進める必要がある。
- △ 令和3年度当初の教科部会資料にある「生徒・保護者へのフィードバック」がまだ十分にできていない。評価について、生徒に対しては口頭での説明を行っているが、その内容を個票としてまとめ、保護者にも見てもらえる形で配付できるよう、令和4年度3学期は取り組みたい。
- △ 評価場面において、ALTの活用が非常に有益であると感じているが、その活用方法についてより深く研究するとともに、鹿屋市の英語教育圏の中で共有していく必要がある。

(2) おわりに

本研究を通して感じたことは、まず、「評価を計画することは、授業を計画することである。」
「評価規準を定めることは、目指す生徒の姿を明らかにすることである。」ということである。
振り返ってみると、評価について迷いのあった研究スタート時点では、自らの行う授業の方向性も不明確だった。その後、「何をどのように評価するのか。」を明らかにしていく中で、「そのような評価をするためには、授業では何をしていけばよいのか。」を自然と考えるようになった。

次に、評価は自分だけでなく、他の教師や生徒、その保護者と共有していかなければならないということである。評価規準を他の教師と話し合うことで、授業の細かな打合せができない場合であっても、目指す方向を近付けることができるし、どの教師が担当でも公平に評価ができる。また、パフォーマンステストに向け、「今回はこのような点を評価する。」と生徒に伝えると、生徒の意識が高まるだけでなく、生徒自身が「ここができなかったから、次、頑張らないと！」と、自らを振り返り見通しをもつことができる。また、通知表を見ながら、生徒と保護者が「自分はこんなことができた。」「自分の課題はこんなところだ。」と話ができるような評価の共有を行っていくことで、教師の評価に込めた思いを家庭で受け取ってもらえるのではないかと感じている。

最後に、ICTの積極的な活用は、これからの評価を大きく変えるということである。特に、評価場面の録画と動画の回収については、生徒も教師も、その時の状況をしっかりと把握し、自分の目指すべき姿に近づくために何ができるのかを明確にできる点で有益だと感じる。また、教師にとって「一仕事」と感じる評価も、学期を通した校務支援ソフトを用いた評価の蓄積によって、効率的で明確なものにすることができる。慣れてくれば、蓄積されるデータを見ながら、「こんなに積み上がってきたぞ！」と評価が楽しみになると感じた。

今回の研究を通して、「指導と評価の一体化」を多少なりとも理解できたと感じている。便利なツールを活用しながらも、一人一人の生徒に寄り添い、互いが納得のいく評価をできるよう、今後も研究を続けていきたい。